

## 人としての光 ことばの中にかくれる

谷地 快一(海紅)

## 『初鶉』の二つの序文

## 序

夙くに出づべきはずであつて出なかつたのが、素十君の句集である。

素十君は文學といふやうなものにはあまり興味をもたないやうである。興味が無いわけでもあるまいが、素十君を満足せしむるやうな文學は容易にみつからないのであらう。が、その素十君が俳句を最もすぐれている文藝として、今日まで身を打ち込んで来たことはあらはれない事實である。

磁石が鐵を吸ふ如く自然は素十君の胸に飛び込んで来る。素十君は劃然としてそれを描く。文字の無駄がなく、筆を使ふこと少く、それでゐて筆意は確かである。句に光がある。これは人としての光であらう。

古今を通じて素十君の句は獨歩であるが、まづ聯想するものは、元祿の凡兆ぐらゐなものであらうか。凡兆の句とも違つてゐるが、強いて類を求むれば、まづ猿蓑の凡兆を考ふべきであらうか。然し句の光といふものは、素十君の獨り擅まにしてゐるところである。この光といふものを説明することはむづかしく、素十君自身にもわからんかしらんが、その人とその技巧から來てゐるものと思ふ。凡兆にもいくらあるかと思ふが、然し素十君には及ばない。

かう述べて來ると、素十君の句を無上に褒めるやうになるが、然しこの讃辭をうけとるものは、まづ素十君のほかにはあるまいと思ふ。

今迄多くの人が争うて句集を出してゐる中に、素十君は全く無頓着であつた。句集を出す面倒をする暇に、一句でも作りたい、といふのが、その本心であらう。

素十君にしたところで、時には詰らぬ句を作ることがある。それは素十君の胸に宿つた自然が詰らぬのではなく、それを現す適當な言葉が見つからなかつた時のやうである。

素十君をしてつひに句集を出さしめた青柿堂主人の勞を多とする。

昭和二十二年五月十二日

小諸俳小屋にて

高濱 虚子

## 序

私はたゞ虚子先生の教ふるところのみに従つて句を作つてきた。工夫を凝らすといつても、それは如何にして寫生に忠實になり得るかといふことだけの工夫であつた。

従つて私の句はすべて大なり小なり虚子先生の句の模倣であると思つてゐる。

甘草の芽のとびくの一ならび

といふやうな句も

一つ根に離れ浮く葉や春の水

といふ虚子先生の句がなかつたなれば、決して生れて來なかつたらうと思つてゐる。

昭和廿二年五月九日

高野 素十

## 『俳句とは言葉の中に隠れること』

お前には俳句を教えるのではない。人間を養うために俳句を教えるのだ。本当は人間が出來てから俳句を習う方がいいんだが、それでは間に合わんからナ▲長谷川耕畝「沐猴而冠」、長谷川耕畝著『俳人高野素十との三十年』新潟雪書房、新潟俳句会叢書7(平15)による。内容は永松西瓜宛て素十發言。

〔初鶉〕句集。高野素十。昭和二十二年九月、青柿堂刊。第一句集。B6判。百八ページ。一ページ七句組み。大正十二年から昭和二十一年までの二十三年間に「ホトトギス」雑誌で虚子選を経たもの六百五十七句(内重複句三句あり)を新年と春夏秋冬の五部に分けて収録し、巻頭に虚子と著者の序文がある。著者は個人句集には否定的な考えをもっていたが、青柿堂主人の熱心な勧めにより出版を承諾した。編集の一切を出版社に任せため、誤字も多く、四季分類の誤りや句の重複もある。序文は著者の文章だけの予定であつたが、出版社が独断で虚子に依頼し、著者は本書の出版まで虚子の序文のあることを知らなかつた。虚子は素十俳句を「文字の無駄がなく、筆を使ふことが少く、それでゐて筆意は確かだ」「古今を通じて素十君の句は獨歩であるが、まづ聯想するものは、元祿の凡兆ぐらゐなものであらうか」と序文で評し、素十は「私はただ虚子先生の教ふるところのみに従つて句を作つてきた」「従つて私の句はすべて大なり小なり虚子先生の模倣である」と述べている。

甘草の芽のとびくの一とならび

のようにその状態だけを精細に写しとつてゐる作品に特色が見られるが、これは「俳句に於て季節といふものは重要な要素で」「季節を詠ずるといふ事は」「写生であり」「それを形の上で示現したのが、花鳥諷詠である」「忠実に自然を観察し写生する。それだけで宜しい」「(「狂ひ花」「ホトトギス」昭7・10)といふ素十俳論の実践であつた。虚子は「厳密な意味に於ける写生といふ言葉はこの素十君の句の如きに当て嵌るべきもの」「(「秋桜子と素十」「ホトトギス」昭3・10)であるとして素十のゆき方を肯定した。この感情を全く拒否した描写主義は感情尊重を主張する水原秋桜子と対立し、このことが新興俳句運動展開の一つの契機となつた。(以下例句略)。

▲松井利彦編『俳句辞典 近代』(昭5) 桜楓社による

## 〔一月の素十句から〕

ばら／＼に飛んで向ふへ初鶉(『初鶉』)  
お降りといへる言葉も美しく(『雪片』)  
太箸をとりて父母なつかしむ(『まはぎ』誌)  
ははそはの母にすすむる寝正月(『初鶉』)  
年酒酌むふるさと遠き二人かな(『雪片』)  
七草のはじめの芹ぞめでたけれ(『桐の葉』誌)  
寒潮の底ひのものの悲しけれ(『芹』誌)  
雪片のつれ立ちてくる深空かな(『初鶉』)  
妹の嫁ぐ栃尾も雪深し(『雪片』)

畢